

史料紹介

綱光公記

——享徳三年曆記——

はじめに

『東京大学史料編纂所紀要』二〇号掲載の「綱光公記 文安三年・四年曆記」に続き、本稿では広橋綱光の享徳三年記を翻刻・紹介する。本記の性格については前稿を参照していただきたい。

享徳三年（一四五四）のこの年、天皇は後花園、將軍は足利義政である。綱光は二四歳となっている。正四位上藏人頭右大弁から、三月に参議へ昇進し、公卿の仲間入りを果たした。享徳三年記は現在、『綱光公曆記』として国立歴史民俗博物館に所蔵されている（広橋家旧蔵記録文書典籍類目六三―八三七）。間明き二行の同年の具注曆一卷に記される（全四一紙。内挿入紙一四紙）。題簽に「綱光公曆記（自享徳三年正月一日至十二月廿九日 自筆本 / 間欠（自正十六尾五廿三首、自六廿尾至廿一、自七廿四至十一、自十二一至六欠） 壹卷 『綴合改めたる通り』と見えるように、途中脱落している部分も多い。貼り継ぎ箇所も複数見え、殊に六月一七日の禁裏和歌御会や七月一日の鷹司房平の任関白などは詳細な記事が記されている。ただし正月記には「委細有別記」

遠須 桃田
藤中 崎
珠牧 有奈
紀保 一郎

（一日条）といった表現が複数見え、綱光は曆記とは別に日次記あるいは別記を記していたと考えられるが、残念ながらこれらは現存していない。政治情勢としては、畠山氏の内紛や山名持豊追討など騒然とした雰囲気を感じられる。そのほか遣明船の帰朝や、樂家の間での主導権争いも興味深い。

調査・翻刻を御許可下さった国立歴史民俗博物館に深謝申し上げる。なお本稿は遠藤（科学研究費補助金・若手研究B）・須田（同）・桃崎（同）・若手研究スタートアップ）、古記録の史料学的な研究にもとづく室町文化の基層の解明」（同・基盤B）の研究成果の一部である。

【凡例】

・翻刻に当たっては、具注曆部分は略し、日付と干支のみ、ゴシック体で示した。推測によるものは（ ）を付した。
・紙背に記された記述は、（裏書）と傍注し、「」で括った上、当該日条の後に続けて示した。
・具注曆に貼り継ぎがなされている場合は、「」で括って示した。明

らかに異筆の場合は更に『』で括って示した。

・文字はおおむね現時通用の字体に改め、改行は原則として追い込みとした。傍書・挿入箇所も適宜本文中に追い込みとした。

・本文には読点および並列点を適宜加えた。

・尊敬を表す闕字は適宜存した。

・欠損の箇所はおよその字数を計って□または□で示した。抹消された文字は左傍に、を付し、判読不能の塗抹文字は、およその字数を計って■または■とした。判読不能の文字は☒で示した。

・本文中で校訂により改められるべき文字や加えられるべき文字は「〃」、人名注など参考のためのものは（〃）に入れ傍に記した。

・なお人名注は現在通用する家名および名を用い、各月の初出時に示した（例えば室町殿は足利三春あるいは義成でなく義政とした）。入道した者については、まず法名を示し、続いて俗名を示した。

・現在、原本では欠損しているが、国立公文書館内閣文庫蔵写本にて補うことができる文字は「〃」に入れ、④の記号を付した。

・その他、適宜○を付して注記を示した。

正月大

一日癸丑、

晴、奉拜天地四方尊神以下如例年、新陽之吉兆、每事任所存春也、万幸（勅修寺）、入夜着束帯、参内、節会藏人右少弁益光奉行、御薬藏人左少弁経茂、小朝拝予申沙汰了、委細有別記、益光初度儀也、每事可加扶持（鳥丸責任）□父卿入魂間、可得其意由返答、当日儀少々又注尋沙汰了、先参御局如例年、被下御盃、幸甚（藤橋綱子）、又参慈母御方、同被下御盃、退出、於予方又如例年有嘉酒也、旁以万幸（美寺）、

内弁権大納言、外弁以下可尋注、及天明事了、

二日甲寅、

入夜雨下、殿上淵醉、予申沙汰、有別記、束帯如恒、（着半貫、着略大帳）参内、慈母等、今日御出御局、嘉例也、

三日乙卯、

晴、入夜参内、被下天酌、退出、三个日如形、祝着無極、依当番帰参、及晩雨下、

四日丙辰、

□早旦参（足利義政）室町殿、如例年、次参大方殿御座所、被下御盃又例年、次方々出向、万里小路出向、有嘉酒、幸甚、

□慈院殿等参、及晩帰宅、今日参西殿如例年、幸甚、被下御盃、祝着、

五日丁巳、

晴、叙位議、予申沙汰、委細有別記、予正上加級也、相当年始、一段所自愛也、執筆徳大寺大納言、公卿万里小路中納言、新中納言、左大弁宰相、（勅修寺）入眼上卿万里小路中納言、清書教秀朝臣、少納言在治朝臣、内記兼帯、弁高清参陣、

職事皆参、内覧、奏聞如例、目六源泰仲取之、申文四五通無之、近例也、

六日戊午、

晴、慈母并御局等濟々今日御出、万里東面光臨、表万歳嘉会、有嘉酒、例年昨日也、叙位議申沙汰取乱、今日御出云々、入夜撰津掃部頭入来、面々御対面、及数献、旁以万幸、一級事人々賀来、

七日己未、

晴、自午刻計降雨寒氣甚、白馬節会、藏人弁高清算沙汰、有別記、雨儀也、内弁権大納言持季卿一級間立叙列、予又同立列、以上式叙人也、

頭中将雅行朝臣、雅国朝臣等同立列、兵叙人也、内弁一級事邂逅儀歟、公卿無人、兩三人也、希代珍事也、輔代又不參、被用丞代、少納言又不參、少將雅国勲代、召使当年一向不參、陣官人勲代之由、於先例者勿論也、召使不參事、無先規由外記申之、雖然就闕如如此、雖陣官人不參時、被用召使、准例也、委有別記、

八日庚申、

晴、依当番參 内、御持僧達參給、申次右衛門督、予可早參由雖被仰、遲參間申次云々、冷泉前宰相祇候、自今日太元法被始行、奉行藏人弁

高清也、早日參

室町殿、御太刀進上、一級御例也、右衛門督八座昇進御例、同參賀、尹卿等今日參賀云々、數刻閑談、御対面後退出、

十日壬戌、

晴、御參 内也、扈從教国朝臣・永康朝臣・永繼朝臣等也、事儀如例

年、予參 内、帥大納言以下濟々祇候、次御院參、有三獻、予・教国朝臣兩人為役送、倍膳今出川大納言・三条大納言等也、於 禁裏又三

獻有之、例年議也、御劍御進上、則付 内裏、御馬・御劍被進之、如

例、又自仙洞も御馬・御劍被進之、

十一日癸亥、

晴、松林院昨日上洛、入来、幸甚々、有嘉酒、榼濟々送給、祝着

々、今日 室町殿參賀之、恒例也、自修南院有嘉茶、祝着々、彼

是万幸々、參 内、依召也、有松囉、入夜退出、

十二日甲子、

□早旦參瑞雲院、如例年、時以後、直方々為礼出向、

御月忌如例、於日野亭有盃酌、伯二位・資世朝臣等有此席、

十三日乙丑、

晴、以民部卿被仰下云、鹿苑院殿節會御見物、御堂上歟、地下歟、先

規念可注申者、引見之処、康応三年正月七日記、節會御見物、内弁

謝座後、御退出云々、堂上地下間、不分明、其子細申入了、殿上淵醉等御見物度々也、勝定院殿大度御直堂也、建來記・宣記分明也、

十四日丙寅、

□祖父御月忌如例、入夜參 内、甘露寺中納言拜賀、陣申文事、自兼

日依□□汰也、頃之參 内、權弁高濑、左少弁経茂等扈從、前駈一人

自万里□□路召遣云々、着陣又如例、有別記、直弁高濑也、申次経茂、

頃之又右宰相中将公澄朝臣拜賀、前駈一人、布衣侍等有之、曉天以下

退出、

三穗丁每年少被囉之、予雜色男依仰召、御懇囉之、其後退出、当西

炎上、不余煙云々、神妙々、

(五月)

〔廿三日〕言、右衛門督、右宰相中将、四辻宰相中将、雅行朝臣、教国朝

臣、益光等祇候、□卿依欲樂不參、予通典一部持參、面々一□持參、

數刻及□、事終、於妻間有一□親王御方有御參、入夜日野前大納言

暁更以後退出、及乱舞、誠醉中余也、有御樂、主上

御琵琶、篳篥右頭頭

廿四日乙亥、

□依余醉、雖当番不參、入夜參 内、右衛門督祇候、

今日慧聖院光庵正御月忌也、如例、抑自瑞雲院告来云、堪侍者、当住

弟子、昨日円寂云々、久見来小僧也、不便々、長病間、且存内事歟、

於院家不可穢由、先日西堂令談畢、生廿一歳云々、自夜初神事、明

後日遙拜并諸社參詣故也、自今日於 禁裏被始行御修法、不動法云々、

(海住山)
高僧

奉行、阿闍梨真光院僧正云々、

廿五日丙子、

晴、綱所慶進來云、六月会從儀師無休間、可為不參云々、是嘉元二年・

応永卅一年等例也、万不便事云々、転任故也、將又相語云、来月等持

寺御講証義悉可為大僧正云々、宸筆御講以下公武之御願未無其例云々、

伝奏民部卿無沙汰者乎、但可依時宜事歟、不好事何被同哉、大僧正外

三个寺間數輩有其体、為之如何、近年儀每事如形、又時兼朝臣入來、

是先日柿御園中下郷給主職安堵例也、凡彼朝臣对予、每度為公武訟訴

条、不可然事也、巨細見文書、仍自陽明突鼻者也、

廿六日丁丑、

雨下、早旦淨水奉拜尊神等、当年未遂、真慮外至也、次參詣吉田社

并賀茂社、祇園・北野・御靈上社等、心静祈念、凌雨中、社壇冷然催

涼氣、一段添心神也氣味、每事所願成就勿論、午刻計帰宅、珍重

廿七日戊寅、

晴、女中・小生等參詣吉田社并御靈等、珍重、西殿・御庵等八幡・

宇治等、昨日御參詣云々、及晚御帰、珍重、有季朝臣進身固、自

愛之由示之、權弁借用記、則遣了、及半更陽明御門前炎上間、乍驚馳

參之処、余煙不及広、尤以神妙、頃之退出、是盗人所行云々、近

日珍事作法也、人々々々馳參、珍重、

廿八日己卯、

晴、頭弁入來、数刻雑談、則同道、乘馬、向日野亭、他行云々、則帰

宅、去廿六日松林院禪師、堅義無為被御執沙汰由、寺門有沙汰

家儀每事申沙汰也、備中等籠居云々、大往生云々、可貴、

廿九日庚辰、

晴、故撰津入道為月忌女中被招、瑞雲院入來、明日故石見守正月忌間、

抑尼公遣仏事料足、是每年儀也、

抑論語注、大迎院主相伝被与予、今日加修理懸表紙、尤可秘、家門可

為重宝、是玄惠法印沙汰歟、及晚行水、

六月

一日辛巳、

自 室町殿退出之後、奉尊神等如每朔、幸甚、

晴、早旦參 室町殿、如例、帥卿、同新大納言・日野中納言・宰衛

門督・北畠宰相中将・子・公躬朝臣・雅康朝臣・永経朝臣・益光等參

賀、構見參後、參大方殿御方、被下御盃、退出、人々同之、大方殿御

方、今日令居給之、驚入由申之畢、当年以外御可引也、珍重、管領

未補間、右京大夫無出仕、入夜參 内、万里小路中納言以下近衆祇候、

被下天酌後、於御前被 申微声等、頃之退出、

忌火御膳陪膳頭弁、兼日次第借与之、袍同借用間遣了、

及晚降雨、大館入道入來、今河入道同入來、雖欲樂世上有体自他談之、

何管領以下不被定哉、莫言、

二日壬午、

雨下、終日不併止、雨晴者、今日於 内裏可有御虫仏面々可祇候由、

夜前雖蒙 勅言、降雨、不參者也、終日宣記目六取之、瑞雲院入來給

室町殿祇候中納言局、今日他界云々、不便、是菅中納言妹云々

三日癸未、

雨下、或日彰耀、陰晴不定、自梶井殿大宿御茶、送給畢、祝着、

此□茶園等予地行相軫事也、(知)家君御時歎、依御所望進入了、仍如此沙

汰給者也、元八百袋給之、近年如此、無謂事也、奉行無沙汰□□沙

汰給由御兼約□可処遲々、背本意由蒙仰者也、奉書如此、去月大略送

給畢、今日 内裏御虫扨近察可參候由予蒙 勅、廻文遣所々了、午下

刻許參 内、面々終日沙汰之、今日於慈母御方奉勸盃、是世間父母養

嘉酒云々、万代儀也、幸甚々、

四日甲申、

雨下、參内、御虫扨如昨日、入夜婦參、甘露寺中納言依相博也、

若宮御方御座者也、賀茂祭御訪相殘分千五百疋、今日自 内被下由

典侍殿□也、祝着畏存由令申了畢、仍而先日内々申請御質物兩種、

御劍、則返上了、

五日乙酉、

雨下、連日終日不止、為之如何、凌雨向日野亭、依御誰義、參 室町

殿云々、則婦蓬葦、次向速水越中入道宿所、是久長病、近日以外增氣

間、為見訪也、老翁来予前、催老淚、誠可愍者也、代々家人也、可悲

々、可惜々、遣木菓代了、当番相博頭中将、依有故障子細也、

六日丙戌、

雨下、參嵯峨御參籠所五大堂、大方殿御籠之故也、山科同道、次詣清

涼寺、心静祈念、帰宅、次向伊勢宿所、入道事為相訪也、參陽明、

禪閣御欲樂之故、為申入也、心苦御体云々、所驚存也、及晚少属晴、

物忌、有季朝臣送給之、祝着々、被行正雨奉幣云々、委可尋記、

七日丁亥、

雨下、あい茶小女、自御局今日令婦給、此間典侍殿有御同宿、

祇園御輿迎也、風流如例云々、榎不上也、仍不參御所々云々、尤可

然事歎、瑞雲院令人來給、昨日止雨奉幣延引、今日被行云々、奉行頭

中将、上卿甘露寺中納言、弁不參云々、

八日戊子、

晴、三伏暑氣甚、有法樂和漢百韻、瑞雲院并真藏主等被入來、頭人

景益沙汰之、巡役也、有其興、典侍殿・万里南面等有御出、暫可有御

注云々、自愛々、入夜參 内宿侍、万里小路中納言相博也、

九日己丑、

晴、万里小路中納言息少女今日令人來給、内府被扶助云々、尤以感悅

々、表千秋万歳嘉会祝着自愛無極々、盃代被持、殊以祝着々、

於慈母御方奉勸某盃、西殿・儒林院等有御出、万幸々、及晚被婦畢、

抑民部卿奉書到來、等持寺御八講參仕事也、未拜賀也、期日以前難事

行間、可故障也、且万里未拜賀以前參仕難叶歎由、相談処勿論云々

相談之処、誠不打任、勿論云々、明後日此子細令示遣者也、

『民部卿』

『等持寺御八講御參日』

事、可為初中結三今日候哉、

可承存候也、恐々謹言、

六月八日

〔中〕

〔廣橋殿〕

十日

十一日壬辰、

晴、御月忌如例、向日野亭、帥卿・伯二位・頭弁会合、有來樂御會儀

歎、頭弁相談畢、不審事歎、帥卿等有所存、如何、予代々以御記相談

畢、

十三日癸巳、

晴、予今日正誕生日也、瑞雲院入來、有祈祷、予早日參詣祇園御旅所、

兩所便路詣因幡堂、珍重々、小生等明日可參詣云々、女中少々今日

有季朝臣物忌送給、祝着く、
十四日甲午、

雨下、祇園御靈會無為云々、向伯二位亭、日野中納言・資世朝臣等會合、有朝喰、頃之婦宅、地下輩有此席、有音楽、不無其興、
(武者小路)

抑今日 室町殿御除服宣下也、頭弁申沙汰、上卿日野中納言、大慈院(足利義教)御時被宣下云々、経茂也、如其申沙汰云々、是浄土寺新門主母儀小宰相死去、御繼母故也云々、仍今日玉津島御法楽延引云々、伯卿御輕服勿論由申入云々、自 禁裏雖有沙汰、依不具不參、不敵く、小生共向豊後宿所、囉物見物云々、

十四日下
(裏書)

享德三年六月十四日 宣旨

征夷大将軍權大納言源朝臣
(足利義政)

宜令除服出仕、

藏人頭左中弁藤原資世奉

消息如例、

十六日丙申、

晴、向飛鳥亭、明日御會詠草為談合也、先備 叡覽畢、被直下き、凡先談合飛鳥、後可備 上覽之處、近年内々儀敷、御會進入每度直被下間、如此致沙汰者也、(広橋兼直)祖父入道殿見御記、 室町殿入見參事、今度被略了、頃之參殿下、(二条持通)条々申談之後、帰蓬宅、雨下、晴陰不定、十七日丁酉、 禁裏今日和歌御會也、早日遣請文畢、

竹不改色、

右和哥題、来十七日内々可被披講、可令予參由、謹■所謂之状

如件、

六「(月十四日)西」

參議網光(広橋)

十七日、雖陰氣、不降雨、三伏暑甚、申剋計着衣冠、(挿入紙)下緒、小雜色三四本、笠持等召具參 内、(一条兼長)尤難可召具布衣、依可有和哥御會也、帥卿以下少々已參候、先之准后、(二条持通)関白令參 内給、御裝束頭左中弁就奉行申行之、

母屋御簾悉垂之、端御簾悉卷之、指図見左、(今見)民部卿為伝奏兼日儀申沙汰之處、俄称所勞不參、何事哉、頃之 室町殿内々以御歩儀、

自唐門御參、於長橋局有着御々直衣、(御下緒)前藤宰相父子粧御裝束、頃之出御議定所、関白令候御簾給、次奉行職事參御前、蒙 天氣、可召人々敷也、無其儀、如何、不依曇晴、每度事也、尤不審く、次親王御方自年中行事迈入当間、(關白脱丸儀所)西、令着座給、次准后・関白令着給、(式部卿)以上北東面

室町殿自北方令入当間給、着御端座、(御湯殿上也、儀一定西)次帥卿以下次第入西面北之第一間着座、(間白地被用之、見指圖)至日野中納言着座、參木一向不着、依狭少也、但臨期以奉行飛鳥井中納言有座次第可着座云々、仍左大弁宰相

以下可着座也、有所存不着、何事哉、経剋以外事也、凡悉可着座事也、然座狭少間、至納言可着敷趣、兼有沙汰間、左大弁以下申所存敷、尤以不可然事敷、數輩上首不殊儀不着也、予何可着哉、云當時儀、旁以加斟酌、其上次第可着由有上宣、旁以勿論く、次雅遠持參文台、次(兼功)頭長敷講師円座、次敷読師円座、如何、先読師円座可敷也、又読師円座返様敷之云々、不可説く、次頭長持參切灯台、有打敷、移置高灯台、灯退、(便不撤高灯台条、如)次奉行職事取集殿上人懷紙、持參置文台、

講師円座、自脇置之、退出之時、(講師)入座上足膝行時、又進座上、所為如何、又懷紙不入懷中取兩手、雖有先規、当大略入懷中、且又多分儀敷、但懷紙不多間、可持兩手由、執柄并飛鳥黃門被命云々、次子懷紙持左右手、文頭有左、々方少指上テ持之、凡左右手指出様持之也、自年中行事障子辺進出、入脇戸北東行、更北行、(離御眼路、不離居、持文)入北第一間、(下足)南行経桂南前也、(但東)西室町殿御着座、講師円座之前二跪テ聊披懷紙端、見端作、(假令)則卷之、少膝行、(先進座下)後以右手及手置人々懷紙上、(但室町殿御前依便宜沙汰之、不可為例々々々)次逆行、

但室町殿御前依便宜沙汰之、不可為例々々々

^{先退座}凡常ノ膝行様ニハ不沙汰也、聊微令沙汰也、見代々御記、親王闕

白以下至室町殿無礼、人々同之、經北路退出、今度候北方、隨便宜也、

抑自北可進出条、可宜也、然而自西可進出由、有其沙汰、尤以無謂事

歟、武者小路前内府・三条前内府、以上入儀定所當間之間、自西進出

条可然事歟、帥卿・日野大中納言猶自北進出、臨期人々所為又不同、

如何、室町殿御起座時、人々動座、次帥卿蒙 天氣、着読師円座、次

召講師、雅康朝臣引裾參進、^{正不著}次召下読師、^{慈野井}教国朝臣參進、候読

師傍、次召講師人々、日野大納言・新大納言・飛鳥井中納言・日野中

納言・^{右兵衛督等也}、此間下読師懸重懷紙退出、次読師取最末懷紙、

披置文台上、^{文上}次講師人々披講、殿上人一反、^大參中納言・參木・

散三位二反、闕白・大臣・三町殿三反也、事了帥卿取懷紙、置文台下、

次室町殿令着読師円座給、人々同座、^{動之}講頌依仰不覆座也、次室町殿目

目飛鳥井中納言、則着講師円座、正不着云々、^先次被進 御製、次室町

殿披 御製、令置文台上給、講師一反見下シテ読之、次第披講七反也、

末二反高講之、其詞云、

竹不^ス改^レ色^ヲといへる事ヲよませ給やまと歌と読之、又臣下端作読

之、其詞云、夏ノ日同シク竹不改色トいへる事ヲよめるやまと歌、

殿上人名字二字、四位加朝臣、四位參木某朝臣、三位參木左大弁藤

原朝臣・右兵衛督藤原朝臣、權中納言藤原朝臣、權大納言、朝臣、

權帥藤原朝臣、闕白、^{クワンハクシエンクワ}准三后、式部卿親王、又大臣八前ノ内ノ大臣、

如此読之、

雅康朝臣講師畢候講頌畢、次人々覆座、^覆所役人々退出其後儀不伺見、

次 入御、人々動座、奉行取懷紙、所役殿上人撤文台以下云々、於常

御所有一献、闕白・親王御方・室町殿有御前御參、闕白殿御陪膳雅行・

教国等朝臣也、帥・日野大中納言・飛鳥井以下、少々候御前、及曉更

室町殿御退出、人々退散、^{令參}予御前御前、無為珍重由申入退出、公宴初

度參勤無為、公私添自愛氣味者也、珍重く、予不候講頌条、無念事

也、

一、散状雖奉載親王、臨期不可然由、其沙汰出来間、大臣闕白以下載

申云々、永徳節会散状猶不載申云々、今度晴御鞠奉載公卿内き、案

之、雖載申、公卿前二式部卿親王卜載申、更公卿卜書之テ闕白以下

可書歟、可否哉、如何、

一、御次第依仰闕白令作進給也、

一、予申沙汰処、空延引之後昇進間、頭弁資世朝臣申沙汰了、近例無

之、古今定有其例歟、尤無念至也、散状以下続左、^{五ノ見}

一、打敷等今度被新調畢、

一、御裝束様、今案御沙汰也、予依仰去三月比度々申談執柄畢、

一、予懷紙書様如此、飛鳥井中納言相談畢、公卿時高懷紙、高サ一尺

二寸五分、或三寸二沙汰之云々、為參木、猶代々二寸五分御沙汰間、

如此沙汰之、殿上人一尺一寸五分計云々、先備 觀覽、被直下畢、

代々公武被入見參、今度於武家略之、

夏日同詠、竹不改色、

和歌、

參議右大弁藤原綱光

我君^亮は^て葉^の

御代^をち^きま^ほや

み^た兄^の竹^の比^色と

う^ぬ覧

十八日戊戌、

晴、及晚甚雨、早旦參 室町殿、昨日御会無為由申入之、人々御太刀

進上、帥卿以下也、

十九日己亥、

晴、向飛鳥井中納言亭、同御会無為由賀之、太刀遣之、此道相馮故也、
礼節一段有之、

廿日庚子、

晴、自今日被行等持寺御八講、民部卿「

」欠〇中

廿二日壬寅、

晴、早日參詣北野社、直向日野亭、依起請也、月輪中納言・伯二位・
正親町宰相中將・予・頭弁・前官務等会合、有短尺、有披講、又有和

漢聯句一折、予入韻沙汰之、入夜分散、不無其興、

廿三日癸卯、

晴、早日參詣北野社、直向伯二位亭、山科同道、參浄土寺新門主、
母儀御事為申入也、參関白、御池納涼染心耳者也、次向冷泉中納言亭、
歡樂訪畢、帰寿域後可為窮屈無極く、裝束自所々借用遣了、

廿四日甲辰、

晴、早日參詣北野社、直參御寺普光院、已日野重子大方殿渡御、以外物念間、
乍外所念仏申、帰宅、御所さま可有渡御云々、參御寺、明日又浄水以

後參詣不苦由、北野寺僧相談問、所參入也、愚存無相違、七日可參詣
故也、等持寺御八講今日結願、着座公卿以下可尋記、東院御講以後可
來由、今夕申遣了、帰寿域、看経、

廿五日乙巳、

晴、早日參詣北野社、依当番參 内、
陽明御不例只御同篇云々、所驚入也、
廿六日丙午、

晴、參詣北野社、瑞雲院殿御月忌如例、
禪閣御不例猶御同篇云々、冬俊朝臣入來、
廿七日丁未、

晴、早日參詣北野社、七今日結願、所自愛也、心中所願成就勿論く、

次詣聖天、帰宅、珍重く、依召及晚參 内、関白殿令參仕給、於東
面有一献、帥卿・同新大納言・菅中納言・右衛門督等已祇候、予依仰
參御前、殿下献料千疋・御櫓十、一昨日被進云々、及数献、被詠進一
首、則被進御製畢、入夜人々退出、伯卿依召祇候、

廿七日下

雲客雅行朝臣・忠富朝臣・為賢朝臣・教国朝臣・頭長通役送御陪
膳帥卿也、

廿八日戊申、

晴、典侍殿令退出給、御神故也、明日月次祭云々、

廿九日己酉、

晴、自関白以雅豊卿承云、関白職近日可有御謙退云々、然者左府可被
達懇望給歟、旁以可然事也、但後年又可有再任云々、去年已令治定畢、
三月必可有御辞退由又必定处、今延引畢、次渡領内東口関可被留、
且准后御傍例云々、可申沙汰由承間、有存旨致披露可申入由申入了、
尤以無謂事也、

陽明禪閣以外御病氣御坐云々、乍驚馳參申入了、前殿下入見參、大略
今日可御事切歟云々、歎有余、三福寺參候、冬俊朝臣等祇候也、
廿九日下

抑大膳大夫入道今朝関白承旨密々鷹司殿令了、条々又蒙仰旨有之、

卅日庚戌、

晴、早日冬俊朝臣・相豊朝臣等告送云、禪閣夜前五時分御閉眼云々、
驚周章外無他、云御長病、云御老体、雖無憑、存當時、迷惑至、所歎
入也、撰日次可參仕申入由返答了、条々又相談了、今晚則奉出三福寺
云々、御薨礼八西山辺、代々御礼云々、関白宣下有子細俄延引、可為
明日云々、自左府有承旨、左府執柄事、昨日室町殿御執奏云々、御使
日野中納言也、六月被如例、御局御出、

網光公記

網光公記(遠藤・須田・田中・桃崎)

七月小

一日辛亥、

晴、早旦參(足利義政)室町殿如例、又奉拜尊神以下如每朔、幸甚々、入夜參

内、被下天酌、祝着々、今夜関白宣下也、

「藏人權弁(勅修寺)經茂申沙汰、上卿權大納言(持季卿)參陣、左大史長興宿禰、大

外記宗賢(高倉清原)中務輔不參、先覽吉書、上卿着陣、抑奉行(開白)詔書・勅書

事、不相觸内記間、不草進、私宅遼遠間、難事行云々、珍事也、然被

仰文章博士為賢朝臣処、故障歟、頃之長興宿禰正和度少内記草進例註

進、間上古(凡)八少内記皆遂儒畢、但當時又如宣命草進之、以准拋念可草

進由被仰康富間、可存知由申也、以外珍事也、及曉鐘上卿着陣、經茂

覽藏人方吉書、(兼而自上卿雖相語、不下、知出納、仍内々奉行書之、)則下弁經茂結申退、於床子座下史長興

宿禰、次經茂就軾仰々詞、(以関白左大臣藤原朝臣為関白令作詔書曰、以関白為氏長、此外兵仗事、三个条云々、可尋註)上卿称唯、經

茂退召内記、少内記康純參軾、被仰詔書・勅書事歟、則持參筥、上卿

披見、猶就弓場奏聞、(清書同之、御禮被加之、)次上卿帰着陣、召中務輔、不參問召六

位外記康純、被下詔書・勅書歟、次召大外記、被仰氏長者・兵仗

事歟、次又召弁、經茂參軾、被仰氏長者事云々、則於床子座前乍立下

知長興宿禰、次上卿以下退出、頭弁・經茂等同道參殿下、則主人(東公)

卿座令出座給、予可着座由兼雖承、未拜賀不申、故障由申入了、尤無

念至也、然任近例被略之、予内々着衣冠祇候、頭弁資世朝臣為家司執

事、(東)勲申次、大外記宗賢持參宣旨如例、次主人入御、於小御所官

宣并詔書・勅書家司持參、内々被覽之、每々後照念院殿御例云々、

於泉殿御会所有一献、頭弁・權弁・一条中将実久朝臣以下祇候、主人

御小直衣、天明時分帰宅、珍重由申入了、殊更進御太刀了、令右府前

関白超越給以後愁訴御座処、今被開高運、尤以珍重々、家司事、就

「世朝臣 兼日被仰了、

抑一座事雖被申、仰詞以下先規不分明間、今夜被略了、誠不審事也、

詔書・勅書付大内記許、臨期少内記被遣之、尤以神妙々、」

二日壬子、

晴、參陽明、禪閣御事為申入也、於門外以冬俊朝臣申入畢、且又自

内裏得其意可申入旨、依蒙勅也、叡言至畏存由可申入云々、自殿

下有御使、条々有承旨、

三日癸丑、

晴、七夕詩題、為甘露寺中納言奉行相催、内々奉書如此、每年儀也、

「二重二テ加札紙、無懸紙也、密々内々儀故也、

一月為牛女媒、(題中取)

右題七夕内々御会、

可令作進給之由被

仰下候也、恐々謹言、(甘露寺)

七月三日

右大弁宰相殿

四日甲寅、(綱光)晴、為御方違俄今夕室町殿日野亭渡御、仍所參会也、今夜御座之、入

夜帰宅、大方殿同御出、珍重々、美物両種遣之、

五日乙卯、

晴、雨少下、向日野亭、室町殿今日可有還御云々、有御短尺、御出

題也、一首予詠進之、兼待七夕也、及晚還御之後帰宅、折五合沙汰、

今日又遣日野亭了、

六日丙辰、晴、及晚向日野亭、昨日儀為賀也、次向細河典厩宿所、是中嶋一円拜

領礼也、遣劍对面謝之、(持賀)

明日愚作准后申談処、少々被直付、為悦々、自方々草花到来、今日御祝言嘉酒等献慈母、千幸万歳儀也、御局等御出、珍重々、雖有不可說次第、無記益、

七日丁巳、

晴、及晚夕立雷鳴、迎二星良辰、綴七葉永言如例年、和漢問雖可張行、禪閣御事加斟酌、瑞雲院等入来給、草花一□進上、内々如例年、〔内々七夕詩歌御会、予懷紙催御短尺処依仰付奉行甘露寺中納言、愚作如此、准后申談、少々被付墨畢、

七夕同賦月為牛女媧、

一首、題中取

參議右大弁藤原綱光

風捲浮雲月色開宮人

乞巧上瑤台双星今

夜可成約一片嫦娥

是好媧

為内々儀間、不及披講者也、如每年、菅中納言・右中弁〔東坊城益長〕高〔海住山〕清今年

献作、其外如去年、見一座、

抑被模心永十六年芳躅、今夕可有七々御楽云々、奉行右衛門督顯言卿也、予及晚參 内、御装束披見処、常御所東面被垂御簾、主上其内為

御座、〔高灯台〕左、〔石供掌灯〕簾外間輿端敷置、親王・大臣以下為座、東簀子端敷門

座、為雲客座、地下輩簀子外敷打板如例、東面外悉懸御簾、洞院前内

府一向申沙汰云々、主上御所作可為御笙・御琴、洞院横笛・琴、今度

始兼作云々、其外如例敷敷、地下奉行〔豊原〕縁秋朝臣申沙汰如例、頃之人々

參集処、就縁秋朝臣四品事、景清〔天徳〕以下上首輩申所存不參、自兼日此沙

汰出来云々、然而 御答趣、縁秋朝臣御師範賞也、雖為何輩不御師範

者、不可四品之上者、今更何申所存哉、景房朝臣事、旧院御代以一段

儀御沙汰、不可為後例由、御沙汰事旧畢、家秋朝臣四品ハ、尹卿職事〔豊原〕時為先例由申掠間、其時分無左右御沙汰、于今御後悔也、但、上者、一度非例、可為後例哉間、旁以難有御沙汰由、有 勅答、然而猶不申承伏之間、洞院御談合処、為御師範賞勿論敷、但曲御伝受以前例不審候、尤可被経御沙汰事敷、彼等申趣有謂由、言上及種々、 叡言云、

曲御伝受不依曲御伝受前後、為御師範御沙汰、何可申異儀哉、然者略地下輩、堂上計可有御沙汰由、被仰洞院処、管所存無地下、未練事之間難叶由申之間、此上者被停止之由被仰出、以外珍事也、所詮公家御沙汰難体間、為武家嚴密可有御沙汰由、以日野中納言被申室町殿間、

忿尋御沙汰候て可被申由、被申御返事云々、彼輩緩怠之至極令露顯者乎、面々申詞不忠直敷、末代之〔アキマ〕作法也、邂逅御楽臨期停止、以外珍事也、仍人々退出処、被召返堂上計、如例年有御楽、則事終人々退出、奉行右衛門督早出、以外由種々有沙汰、其段難尽筆舌、草花御立花如例年、及天明事終、予同退出、

乞巧奠如例、後聞、曲御伝受以前被行賞例有之云々、

八日戊午、

晴、參 内、内々依有一献也、草花御賞翫也、

十二日壬戌、

晴、詣瑞雲院、施餓鬼一会勲行之、毎年儀也、御月忌并淨兼童子正月〔兼卿ノ男、文安四年正月二日没〕忌故也、又祖父入道殿等所申会香也、有時等、兼日院主談合、料足遣之、今日洞院前内府右府事、可有任大臣節会由、有其沙汰、然而臨期

延引畢、西園寺内府等首也、無所存云々、不審々、

十三日癸亥、

晴、速水越中人道淨誓未剋計死去、普代家人、可惜々、長病遂以円

寂、不便無極、臨終正念々仏申、事終云々、可貴可然、生年六十、

十四日甲子、

(足利義持) 晴、參相国寺鹿苑院・勝定院・普光院等、各申御焼香、又參廬山寺、

故女院申御焼香、院主出逢雜談、(足利義教) 詣瑞雲院御焼香、水向等如例年、心

静代々各念仏帰宅、愚亭儀又如例、御局御出、於予方■奉勸一盞、慈

母同御出、今夜御灯呂一進 内裏畢、毎年嘉例也、当年泉涌寺加斟酌、

所有存旨也、

十五日乙丑、

晴、少々雨下、早旦詣瑞雲院、公私御霊供沙汰之、為御焼香也、心静

念仏之後帰宅、供料兼日同加下知、於持仏堂水向等如例年、抑所々蓮

供御沙汰進之、(万里小路冬房) 万里へも同沙汰遣之、万歳嘉例也、自撰津掃部方又送

給、祝着万幸く、於夕方賞翫蓮供御等如例年、珍重く、南面今日御

帰アリ、入夜参 内、御祝如例年、珍重く、御灯呂拜見、依番宿侍、

十七日丁卯、

晴、自所々五色到来、賞翫、則又遣所々、如例年、

上進之江瓜廿今日到来、

十八日戊辰、

晴、参 内、御霊祭礼無為、長橋出御、 叡覧如例年、有一献、万里

少路中納言・四辻宰相中将・予・頭中将祇候、

十九日己巳、

晴、向日野亭、有連句一折、尹卿来臨、頭卿遂以一句菅沙汰、明家輩

無念事也、入夜帰宅、上句者十五夜於 内裏人々進上御灯呂、以題目

可沙汰上句由、蒙 勅言、人々申上之、予御硯鶴舞所申之、其儀亭主

相語処、則以此上句、有一折、不無其興、彼対共 御製歌相合畢、嘉

例也、

廿日庚午、

晴、参 内、依当番也、御精進也、御国忌等也、向新中納言(高倉)、昇

進事賀之、彼家今初也、八座猶以近例、官位遼遲時節也、可悲く、

御執奏也、(飛鳥井) 雅親卿辞退闕云々、日野中納言為武家御使庭上参任、予尋

聞処、衆人停止愁訴之上者、不及被召進請文由重御申間、然者御申詞

之趣可注進□武家、仍此日可注進由申之、進奉不参

〔廿日

輩三人、(大徳) 被染 宸筆、自縁秋朝臣為下臆身不参条、緩怠之至

極間、被止出仕、可有御罪科由被申之、日野中納言畏承之由申之退出、
〔為後勘、予重尋取続加之者也、

就縁秋朝臣四品、

上首景清已下同日

位記事雖及愁

訴、堅依被仰念、

向後可断絶四品之

競望由承伏仕了、

仍而於請文者、不及

被召進、云 公宴云

神社参役、不可及違

乱、万一有背由伏之

旨者、一段可被処罪

科者也、

御申詞案七、廿 一

廿一日辛未、

晴、夕立雷雨、無程晴、

廿二日壬申、

雨下、時々日彰出、月輪中納言送五色、

廿三日癸酉、

雨下、及晚日野中納言有音信、樂人御罪科事、自 室町殿被申御返事、可參 内云々、則衣冠參内、入夜日野中納言庭上祇候、御申詞一紙注進上之、勅答之趣、明日可注遣由、予仰之、子細見両紙、最初儀子依申仰也、

〔挿入紙〕就縁秋朝臣四品事、

景清以下向後停止四品之競望、云公役云

神役、不可申違乱之旨、承伏申之由被聞食

畢、隨而彼等請文事、為後証猶可然哉之由、雖

被思食候、如此嚴密御成敗之旨為肝要之間、

上首五人御罪科事者、可有御免候、於進奉

不參三人悉被止出仕由、同被聞食候畢、

〔返〕仰詞〔享德三〕七〔中〕廿二〔欠〕

(十一月)

十一日戊午、

晴、寅刻二星合云々、去月同体也、兵革大將軍鎮云々、所驚人也、

十二日己未、

晴、御月忌如例、入夜世上以外物念間、所馳參 内也、

管領可在国之由有其沙汰仍而自禁裏以勅使可被留仰也

十三日庚申、

晴、參 内、依当番也、副番親長卿、雅行朝臣等也、

十四日辛酉、

晴、御庵等御出、祖父入道殿御月忌也、依副番、參 内、

十五日壬戌、

晴、夜半計世間鳴動、如雷氣、以外次第也、入夜深雨甚、

十六日癸亥、

晴、向日野亭、世上物念沙汰也、未決云々、言語道斷之事也、

十七日甲子、

晴、嚴霜深、

十八日乙丑、

晴、依当番早旦參 内、入夜婦參、副番二番衆也、

世上可属無為由有其沙汰、惣別大慶也、

東北院僧正入來給、折紙隨身、感悅由返答、則旅宿可罷向也、

十九日丙寅、

晴、慈母新殿今日御遷給、仍而勸申嘉酒、御局等可有御出由也、珍重

、自常德院有使者、対面之後被帰了、

廿日丁卯、

晴、日野中納言示云、世上物念、播磨・備後両国山名御免、於

彦五郎者本領千余歟所可去渡分令落居畢、仍而今日御太刀可進上、念

可參 室町殿云々、然馳參進上御太刀、人々同之、向万里亭、次向東北

院旅宿、香合・盆・太刀等遣了、天下静謐、惣別大慶也、仁王經大法

於 室町殿被修法、三宝院准后被勲修了、

廿一日戊辰、

晴、雪下、無程晴、抑諸社祭依穢延引、可為他月云々、春日祭他月例

不快歟、可尋記、新嘗祭停止勿論也、

廿二日己巳、

晴、詣七觀音、七人与七人、十四人男共上下召具畢、依立願也、長衆

寺下向路、称名寺張行一盞了、所願成就勿論、文殊堂・北斗堂等同參詣了、

廿三日庚午、

晴、依当番參 内、御局・万里南面等今日有御帰、此間御座也、

廿五日壬申、

晴、

廿六日癸酉、

晴、入夜參 内、有一猷、

廿七日甲戌、

雪少下、畠山左衛門督入道今日病氣以後出仕也、(畠山)弥三郎同召具云々、

伊与守近日可上洛由有其沙汰、希代事也、転変之世上也、

廿八日乙亥、

晴、依当番參 内、早旦向畠山入道許、是為賀出仕也、遣太刀畢、

廿九日丙子、

晴、甲斐入道去一兩年以來、(常侍、將久)室町殿時宜不快問今日御免、入見參云々、

御馬十疋以下進上云々、(此間三年)

卅日丁丑、

晴、向日野亭、百疋隨身、(坊城俊秀)尹卿以下会合、一盞三猷之後分散了、(中)

(十二月)

七日甲申、

晴、粥事有之、珍重、(豊子女王)慈母之御沙汰也、

八日乙酉、

晴、煤払、依吉日沙汰之、珍重、当年八有存旨、忿致其沙汰了、

幸甚、

九日丙戌、

晴、自日野黃門有使者、月次祭、兼名卿愁訴無謂事也、(吉田)忿可奏聞由返答了、於夕陽參 内申入了、一昨日自多峯三種(唐錦二段、しや一段、文有)今度唐艘御礼云々、依仰子拝覽了、(勝光)

十日丁亥、

晴、早旦向日野亭、有朝飯、人々会合、今度天龍寺唐艘色々、(足利義政)殿御一覽云々、散々沙汰成由風聞、

抑昨日北野社・御靈・聖天・行願寺等參詣、心静念願了、悉皆所願所

成就無疑、珍重、

十一日戊子、

晴、旬日也、一段奉拝尊神以下、珍重、畠山伊与守明後日上洛由

風聞、就其物念有之、(細川勝元)管領等可在国云々、有播磨国乱之故云々、定浮

說歎、先以天下式、歎而有余者哉、參 内、有奏事、天明又有粥事、

女中沙汰也、珍重、

十二日己丑、

晴、御月忌於瑞雲院致沙汰、加下知了、煤払以後故也、女中有産氣、

被移对屋、平安勿論、珍重万幸、參 内、終日祇候了、

十三日庚寅、

晴、風静、夜前四時分男子延生、(護)平安也、仏神冥助也、自愛祝着無極

、慈母御方等令見訪給、珍重、寿福延長每每如思、畠山

伊与守没洛以後今日上洛、千騎計有之云々、

十四日辛卯、

晴、伊与守今日出仕云々、裏頭云々、向日野亭、雑談之後帰宅、參

闕白殿、御拝賀事申承之退出、

祖父入道殿御月忌、於瑞雲院致其沙汰如例、

抑自高野小松共召寄、鎮主并瑞雲院等植之、庭にも植之、自愛、

十五日壬辰、

雨下、終日不^(休)休、參 内、是樂人三人去七月被止出仕了、今日自 室町殿御免事御執奏之趣可披露由、日野中納言送書問、為申入了^(也)御執奏之間御免之旨被仰出了、及晚向畠山亭、遣太刀、伊与上洛故也、

十七日甲午、

晴、參 内、別殿 行幸也、依内々出御、頭弁以下退出、於長橋有一獻、予等祇候、抑御修法於本坊被始行云々、

十九日丙申、

晴、春日祭也、他月例邂逅也殊為不快、然而自寺門令申間、被行云々、上卿月輪中納言、弁益光、使実仲朝臣云々、内侍被用張輿云々、無車故歟、冷洛作法也、平野祭又延引云々、

廿日丁酉、

晴、自今日維摩会被始行云々、勅使資世朝臣也、御訪切給外、三千疋沙汰云々云々、就其有種々沙汰等、然而依先例沙汰之云々、今夜内侍所臨時御神樂云々、今日依吉日、小生祝也、千幸々、慈母・局殿等御出、一盞御張行、祝着々、

廿一日戊戌、

晴、就羽田庄段錢事、以女房奉書被申 室町殿了、祝着々、仍而予持向日野前大納言亭、巨細示之、自往古不致沙汰処、今度始而如此之趣示之、可披露由答之、向菅中納言亭、息男加首服為賀也、賀太刀祝着由示之、自陽明有御使、御領事也、

廿三日庚子、

晴、円徳寺殿正御月忌、於瑞雲院致其沙汰如形、進時料等、是隈猪殿御旧跡一段有子細、如形致其沙汰者也、其子細見文書、西山・河東辺卅余个所為歲末礼出向了、入夜參 内、宿直也、今日月次祭云々、廿五日壬寅、

晴、元齡之御月忌、於他所致其沙汰如例、

廿六日癸卯、

晴、御局并慈母御方御參 室町殿、珍重々、入夜御還、有一獻云々、公武多以來臨、松林院上洛、榼等送給、自愛々、

抑入夜畠山弥三郎重而又没落云々、青侍神保以下相具云々、希代之体也、維摩会今日結願云々、珍重々、勅使資世朝臣也、

廿七日甲辰、

晴、室町殿申下刻御參 内・院如例年、貢馬御覽物也、及數獻畢、十御馬以外過物也、已欲上大床、隨身二度落馬、希代一興也、自兼日有其沙汰御馬也、御厩内也、入夜御退出、於院御所者無一獻、御歩儀也、抑予就代々家一疋可被預下、雖致微望無其闕間、無力者也、今日吉田祭、弁経茂云々、人々來臨、

廿八日乙巳、

晴、入夜雨下入夜雨下、人々又來臨、豊後景富昨日上洛了、今度江州段錢事、希代之御成敗、六角方乱吹至極等有之云々、天罪勿論々、

抑土岐池尻揖斐庄年貢今日五百疋致沙汰間、忽返遣了、直務事公方歎申了、当年為上意被仰間、少事二千疋分令治定、猶以無沙汰也、猛惡事也、

廿九日丙午、

雨下、則晴、早且參 室町殿如例、御対面以後諸大名等方々出向、及晚參 内、申入退出、抑揖斐庄年貢且千疋、今日致其沙汰者也、